

2020年度Aセメスターにおける対面授業実施について

2020年8月25日

教養学部・総合文化研究科の学生、教職員の皆様、新型コロナウイルス感染症への対応では皆様方に多大なるご協力を頂き、この場をお借りして感謝を申し上げます。とくにSセメスターの定期試験においては、これまでのところ大規模な不正行為の発生などは報告されておらず、学生と教職員の皆さんを本当に誇りに思うとともに、この場をお借りして深く感謝の意を示したいと思えます。

さて、今回は来るAセメスターにおける対面授業の現状について、学生と教職員の皆さんにご説明とともに、お願いをしたいと思っています。いつもお願いばかりで心苦しい限りですが、どうしてもお伝えしたいことなので、以下長文となりますがお許し下さい。

ご存じの通り、教養学部・総合文化研究科の2020年度Sセメスターについては、全授業のオンライン化で対応せざるを得ませんでした。緊急事態宣言が発令されるなどの状況下では、最悪の事態を回避すべく緊急避難的な対応として致し方なく実施せざるをえなかったからです。これは、この春においてはCOVID-19がどのような感染症についての情報が不足しており、経済学者のフランク・ハインマン・ナイトの言葉を借りれば、確率分布が予測可能な「リスク(risk)」ではなく、予測不能で管理が困難な「不確実性(uncertainty)」に相当する状況であったことが原因です。

大学は、活動範囲が広く感染を拡げる可能性が高いと考えられる若者が多く、広域から移動してくる不特定多数の学生が大規模教室で密集して行動し、頻繁に教室間を移動するなど、大規模クラスターを生みやすい環境です。特にCOVID-19についての知見が乏しかった「不確実性」の時期においては、適切な対応は、全ての授業をオンラインにするという手段しかありませんでした。

オンライン授業については、今年度はにわか仕込みの点もありましたが、学生や教職員の皆さんが協力して、なんとか乗り越えることができました。その中で、オンライン授業には、良い面・悪い面の両方があることが見えてきたと思います。オンライン授業は通学や通勤の必要もないですし、チャットなどで意見交換ができるなど、メリットも多数あります。その一方で、学生の皆さん、とくに一度もキャンパスで対面授業を経験していない1年生にとっては、大学に入学した実感も得にくく、またリアルなコミュニケーションの機会もない中、不安と不満が蓄積したという意見が出てきています。

実際に、オンライン授業に関する学生を対象とした全学アンケートなどを見ますと、1年生などから早期に対面授業を開始して欲しいという切実な訴えが多数ありました。その一方で、感染に対する懸念から、引き続きオンライン授業を用意して欲しいという希望もありました。社会的にも、小中高校で対面授業が復活している中、大学生だけが一人部屋にこもってオンライン授業を受け続けることに疑問を抱く意見が増えています。文部科学省からも、この秋以降の大学授業についてはオンラインと対面の双方を活用した運用を行うよう要望が出されています。東京大学でも、総長や理事の意見を踏まえ、全学的に

できるだけ対面授業の機会を増やし、学生にキャンパスでの活動を認めて行く方針が打ち出されています。

加えて、先日開催された日本感染症学会における専門医の見解等では、少なくとも現在の感染の波については、「大都市で数万人が死亡し、医療が崩壊するといった最悪のシナリオが起きる可能性は低まってきた」などの意見が出てきています。また、どのような属性の人が重症化しやすいかが明らかになり、重症患者に対する臨床対応法も少しずつ確立されています。感染が拡大しつつある状況でも、酒類を提供する飲食店の深夜営業の制限など、部分的な行動制限を適宜導入することで、ある程度拡大速度を抑制できることもわかってきました。つまり、COVID-19の問題はもはやマネジメント不能な「不確実性」ではなく、管理が可能な「リスク」へと転換したと考えられます。

以上のような現状を総合的に分析し、教養学部長室・総合文化研究科長室では、不確実性を恐れて全ての授業をオンラインで実施することから脱却する時期に来たと判断いたしました。まずは、大人数の授業はオンラインで実施しつつ、対面実施の必要性が高いと考えられる「実験・実習」、「少人数ゼミ」についてできる限り対面授業を復活させる方針で準備を進めることにしました。また、前期課程において、学生同士の交流の大切な単位となっており、対面実施の必要性も高いと考えられる「初修外国語」のクラスについても対面授業を導入すべく準備を外国語部会の先生方をお願いしています。もちろん、対面授業を希望しない学生向けのオンラインのプログラムも同時に準備することになっています。

一方で、一つ大きな課題が出てきました。それは、対面授業を予定している科目の教員から、感染リスクに対する不安の声が多数寄せられていることです。教員の中(私自身もそうなのですが)には、自らや家族が新型コロナウイルス感染症の高リスク者である人が多数います。これらの先生にとっては、どうやって感染から身を守りながら、学生の皆さんに教育を届けたいのかという大きな葛藤が生じています。また、対面授業に加え、オンライン授業を希望する学生に向けてオンラインのプログラムも準備しなければならないことから、対面授業を予定している科目の教員に多大な負担がかかることも事実です。

これに対して、学部・研究科としても何もせずに傍観しているわけではありません。科目の限定と隔週出席などによる登校学生数の削減、座席配置(市松模様型など)の工夫、キャンパスでオンライン受講を可能とするWIFI環境・給電設備の改善、PC充電ステーションの導入、アクリル板・消毒液やゴミ箱などの適切な配置、ネットでの入構・健康管理システムの導入、保健センターによる実習場所のリスク調査と指導、換気改善のための網戸やサーキュレーターの配置、キャンパス立ち入り者への接触者確認アプリCOCOA等のインストール義務化、COCOA等の通信信号を利用したキャンパス内混雑度モニタリングシステムの導入(本学教員が開発した東大独自のシステムなど)、TAなどの補助の拡充、その他の対面授業開始に必要な設備の手配、教員への予算的補助など、多大な労力・経費を費やして、この秋までにできる対策を学部・研究科と大学本部が協力して一つ一つ着実にを行っています。

学部長室・研究科長室では、このような対策を行いながら、不安感を抱いている教員にご理解頂けるように、誠心誠意、説明や調整、打開策の模索を続けています。しかしながら、これまでのところ対面授業に参画可能な教員が十分確保できるか、正直申して心許ない状況となっています。一部の学生の皆さんにとって十分対面授業が用意できないことも想定せざるを得ない状況です。

そのような次第ですので、もし対面授業を受けられることとなった場合は、それを担っている先生方がどのような思いで授業に臨んでいるかを十分理解していただき、是非その貴重な機会を大事にして活かしていただきたいと思います。また、対面授業が予定されている科目の先生方にも、学生の切実な要望に耳を傾けていただき、可能な限り最大限のご協力を賜りたく、伏してお願い申し上げます。

「大学」という場は、単に知識を学生に届ける場や研究を行う場だけではありません。学びの場から派生する学生同士、あるいは教員と学生との交流や雑談が、学問を跳躍させるための「遊び」を与え、また人間的成長を生み出します。このような活動こそ、本当の意味で大学、とくにリベラルアーツを大事にする教養学部・総合文化研究科を輝かせるのではないのでしょうか。

このような観点から見ますと、一度もリアルな人的交流をしていない新入生にとって、対面の人的ネットワークを確立している2年生以上との経験上のギャップは想像以上に大きいと思います。私は、是非多くの1年生の皆さんにキャンパスに集っていただき、感染拡大に気をつけながら、本来の大学における輝きを体験して欲しいと考えています。

最後になりますが、学生の皆さんや私ども教職員が、一つのチームとしてこの難局に向き合って課題を克服し、大学の本来の姿への回復に力を貸して欲しいと思います。そして、歴史的にも語り継がれる経験を共有し、やがて訪れる希望に満ちた世界をともに迎えられることを心より祈っています。

教養学部長・総合文化研究科長 太田邦史